

## 「デジタル化」と「アーカイブズ」

理事長 荒木 雅信（大阪体育大学）

学会運営の一端を担うことになって1年が過ぎようとしている。学会は50周年を迎え、次の時代へと舵をとった。この1年、先輩諸氏から叱咤されながら、とにかく出来ることからやったつもりである。昨今は、コンピュータの導入と普及で事務処理の効率化が進み、随分と手間が省けるようになった。学会の運営に関する処理は出来る限り「デジタル化」を図りたい。何のために、時間と経費の効率化のためである。これについては、各位からご批判も受けるが、会員管理に伴う諸手続きや学会通信は、出来る限り「デジタル化」を図る方針である。そうしないと、学会事務局をお引き受け頂ける会員がいなくなり、最終的には会員の多い大学が事務局を引き受けざるを得なくなる。学会運営の負担は、会員相互で分担すべきである。

しかし、学会活動の主体である体育・スポーツ科学に関わる「研究」や「教育」、そして「啓蒙・普及」などの活動は、「デジタル」ではいけない部分が多い。学会は50年を経て、相当の学問的教育的「知的財産」があるにも拘わらず、それらは事務局の段ボール箱に仕舞われている。事務局を引き受けるにあたり、それらの資料を目にして、衄惚たる思いがした。そして、学会の「アーカイブズ」を構築する必要性を感じている。そのためには、学会活動の拠点とそれらを管理する人材（事務局と事務職員）が必要である。その拠点に、大阪体育学会「アーカイブズ」を設置するのである。そこに行けば体育・スポーツ科学に関わる「研究」や「教育」、そして「啓蒙・普及」などの活動の資料（研究誌や学会サプリメントはもちろん、学会のポスターやチラシ、研究・研修会の資料や会議のメモなど）が、すべて整理されていて「いつでも・誰でも」手に獲ることができる。そのような「知的財産」の構築と開示こそが、次の世代に残す仕事と思う。